

Title	換喩と個体性 : 名詞句単位の換喩における語用論的 コネクターの存否からみた
Author(s)	大田垣, 仁
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2011, 45, p. 21-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25124
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 換喩と個体性

――名詞句単位の換喩における語用論的コネクターの存否からみた――

大田垣 仁

キーワード:換喩、メンタル・スペース、役割、値、語用論的コネクター

# 1. はじめに

一般に、換喩(metonymy、メトニミー)は、ある言語表現をそれと密接にかかわる別の表現であらわす修辞技法と規定される。本稿ではそのなかでも名詞句に換喩が現象するものを分析の対象とする。以下これを、名詞句単位の換喩とよぶ。

筆者が依拠するメンタル・スペース理論(Fauconnier 1985、1997)の 枠ぐみでは、名詞句単位の換喩がおこなう間接的な指示は、換喩によって 指示し指示される対象が語用論的コネクターでつながれることで名詞句の 実際の指示対象が同定されるとする「アクセス原理」によって説明される。 しかし、日本語の換喩表現として瀬戸(1997)が示す例のなかには、アク セス原理がはたらいていないと考えられる類型が存在する。これは、筆者 の観察にしたがえば、「全体で部分を表す換喩」や「容器で中身を表す換喩」 とよばれる類型である。この類型を、佐藤(1982)は「まれな形式」とし、 森(2001)がこの考えを支持する一方で、瀬戸(1997)や西村(2004、2008) は換喩の遍在性を担保し頻繁に用いられる形式と考える。

この議論をふまえ、本稿では「全体で部分」や「容器で中身」を表す換喩が名詞句単位の換喩の類型としてどのように位置づけられるか、という問題を出発点として、名詞句単位の換喩がメンタル・スペース理論からみ

て指示対象のずれ、すなわち語用論的コネクターによる名詞句の指示の拡張があるもの、参照点構造における活性化領域のずれが語用論的コネクターの存在にみえるもの、換喩を由来とするがカテゴリー化してもはや共時的には換喩とは呼べないもの、に分かれることを述べる。

本稿の構成は次のとおりである。まず第2節において本稿で分析する日本語の名詞句単位の換喩の例について記述的観察をおこなう。第3節で本稿の分析の方法と道具だてについて説明する。第4節で第3節で提示した枠ぐみを用いて第2節で観察した換喩表現について分析する。第5節でそれまでの論旨をまとめ、今後の課題と展望について述べる。

## 2. 言語現象の記述的観察

ここでは先行研究の挙例をもとに、名詞句単位の換喩について記述的観察を行う。まず、次の例は、典型的な換喩表現として先行研究においてしばしば挙げられる例である。「かつ丼」でそのかつ丼を注文した客を、「鍋」で鍋料理を、「夏目漱石」で夏目漱石の著作を表していると考えられる。

- (1) a. かつ丼が食い逃げした。
  - b. 昨日は鍋を食べた。
  - c. 夏目漱石は三階の文芸コーナーにある。

また、上記の典型的な換喩の他にも瀬戸(1997:169-70)は、次のような例を換喩としてあげる。

- (2) a. 入れ物で中身:鍋が煮える/薬缶が沸騰する
  - b. 入れ物で中身の拡張: <u>本棚</u>をかきまわす/<u>水槽</u>をいれかえる/ <u>スタンド</u>がわく/川があふれる/新幹線がとまる/<u>村</u>が眠りに つく/ワシントンは今回の和平提案には慎重な姿勢を示した

c. 全体で部分: <u>風車</u>が回っている/<u>メガネ</u>が曇った/彼は<u>電話</u> をとった/<u>頭</u>を刈る/<u>ボート</u>を漕ぐ/<u>自転車</u>がパンクする/ シャンペンを抜く

このような例は一般に、「全体で部分を表す換喩」や「容器で中身を表す換喩」と呼ばれ、Langacker(1984、1993)が「参照点と活性化領域のずれの現象」として指摘する例に対応している。これは、あるアクセスしにくい対象に、よりアクセスしやすいものを参照点として心的にアクセスするという考えである。これらの類型を換喩と認めるか否かについては、佐藤(1982)を出発点とした、瀬戸(1997)、森(2001)、西村(2004、2008)の議論がある。

まず、佐藤(1982)は「全体で部分を表す換喩」が「実際の表現形式としてはまれ」であり「修辞性」」があまり感じられないことを主張した。この佐藤の主張に対し、瀬戸(1997:186-92)は「全体で部分を表す換喩」がまれな表現ではないことを主張し、結論として「伝達の主眼は全体性にある」としつつも、「全体は論理的には述詞を媒介にして部分を指示する」という考えも保持した。そして、瀬戸の主張について西村(2008)は、瀬戸(1986)やLangacker(1984)の例をもとに、換喩を「ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象」と定義した。そして、認知言語学の観点からみて全体で部分を表す換喩がひろく存在し人間の一般的な認知能力を反映しているということを主張した。一方、森(2001)は佐藤(1982)の考えを支持し、「全体で部分を表す換喩」を「同一対象の指示形式としてまれにあらわれる」とし、瀬戸が「全体で部分を表す換喩」としてあげた例を、それより下位の表現にするとくどくなる「通常表現」であると主張した。

以上の議論をふまえて、全体で部分、容器で中身を表す換喩を換喩とみなすかについては、4節であらためて述べる。

# 3. 分析の方法と道具だて

ここでは本稿の分析の方法とその道具だてについて述べる。本稿は名詞 句単位の換喩における指示対象のずれの有無について、メンタル・スペー ス理論にもとづく名詞句の関数的な側面に注目した分析をおこなう。その ために、スペース、役割、値、コネクター、アクセス原理の諸概念および、 メンタル・スペース的にみた名詞句の指示について整理する。

メンタル・スペース理論では名詞句を関数として、スペース・役割・値の相対的な関係として捉える。ここでいう名詞句とは名詞が文に実際にあらわれた形式である。井元(2001:26-8)によれば、スペースとは「述定の対象となる最小の心的表象が存在し、述定による属性を保持していると考えられる領域のこと」である。役割とは「名詞句が表しているカテゴリーそのもののこと」である。値とは「特定のスペース内で、役割の属性を満たす要素のこと」である。これらは役割を r、値を v、スペースを mとすると、r(m) = vという関数の関係をなす。スペース内に存在する、時間、場所、信念などの属性がこの関数に変域として代入され、値を限定する。値は名詞句の指示対象であり、役割による値の限定がメンタル・スペース的にみた名詞句の指示である。

井元 (1995) によれば、文の記述する内容が、名詞句の役割に帰着されるときの解釈を役割解釈と言い、値に帰着されるときの解釈を値解釈と言う。たとえば、次の例では、話し手がいる現在スペースに対して、"In 1929" というスペース導入表現によって 1929 年スペースが設定される。

(3) In 1929, the president was a baby. (Fauconneir1985: 30)

現在スペースと 1929 年スペースのそれぞれに注目したとき、この文は 次の4つの解釈をもつ。

- (4) a. 現在スペースにおける値解釈:現在、大統領の職務についているある特定の人物は1929年当時、赤ん坊であった。
  - b. 現在スペースにおける役割解釈:誰であれ、現在、大統領の 職務についている人物は1929年当時、赤ん坊であった。
  - c. 1929 年スペースにおける値解釈:1929 年当時、ある特定の 赤ん坊が大統領の職務についていた。
  - d. 1929 年スペースにおける役割解釈:誰であれ 1929 年当時の 大統領は赤ん坊がその職務についていた。

以上の例では、ふたつのスペースにおかれた大統領と赤ん坊という役割の成員である値が同一性のコネクターによって対応づけられている。このようなスペース内の要素をつなぐ装置を Fauconnier はコネクターと呼ぶ。あるスペースに存在する要素がコネクターによって別のスペースに存在する要素を指定する働きを Fauconnier はアクセス原理を用いて説明する。

(5) 二つの要素 a と b がコネクターFによってリンクされていれば (b = F(a))、要素 b はその対応物 a の名前か記述か指さしかに より同定できる。 (Fauconnier1997:41を翻訳)

この時、対応物 a をトリガー、対応物 a によって指定される要素 b をターゲットと呼ぶ。

以上のように、談話構成上の自然さからみて不自然なものが選択されに くいとしても、主語や目的語などの文の指示的位置にある名詞句は、コピュ ラ文に代表される言語そのものについて言及するメタ的な言明をのぞいて、 役割解釈と値解釈をもつと考えられる(井元 1995、2006)。さらに、役割 関数をコネクターとアクセス原理を用いて拡張することで、名詞句がもつ 多様な解釈の可能性について説明することが可能となる。

さて、(3)の例で導入されたコネクターは異なるスペースに存在する同 一の対象をつなぐコネクター、すなわち同一性コネクターであった。一方、 名詞句単位の換喩における指示対象のずれにもコネクターが介在しており、 これは語用論的コネクターと呼べるものである。これは、ある単一のスペー スに存在するトリガーとターゲットをつなぐ社会的・心理的な関係性のこ とである。たとえば、「かつ丼が食い逃げした」という文では、スペース として飲食店が設定され、「かつ丼」という役割がトリガーとなり、その 役割がもつ注文品という属性が、そのかつ丼を注文した特定の客をター ゲットとして指定するために用いられる。この際に利用されるのが注文品 と客との間にある社会的な関係性である。先に示した同一性コネクターで は複数のスペースにおかれた値がコネクターによって直接つながれていた が、語用論的コネクターはトリガーとして実際に文に導入される役割と、 ターゲットとなる値がおかれる潜在的なカテゴリーとの間に生じている。 したがって、名詞句単位の換喩における指示対象のずれは、より厳密に規 定すると次のようになり、語用論的コネクターが名詞句解釈にはたらいて いるか否かが、ある表現が換喩であるかないかを区別するといえる。

(6) 名詞句単位の換喩における指示対象のずれとは、トリガーとなる役割とターゲットとなる値がおかれる潜在的なカテゴリーが 語用論的コネクターによってつながれていることである。

#### 4. 分析

本節では、2節で行った観察をもとに、3節で示した道具だてを用いて、 名詞句単位の換喩における語用論的コネクターの存否について分析する。 3節では、名詞句単位の換喩の成立条件である語用論的コネクターの働きについて規定したが、分析に先だって、語用論的コネクターが存在しない例についても規定しておく。一見、換喩のようにみえるが語用論的コネクターが存在しないものとして、「換喩由来のカテゴリー化した名詞」と「値の側面のずれが語用論的コネクターの存在にみえるもの」が考えられる。

まず、換喩由来のカテゴリー化した名詞について述べる。この類型に該 当するものとして次のような例がある。

# (7) 昨日は鍋を食べた。

この例は鍋という容器の名称を用いて鍋料理を表している。由来はなんであれ換喩的な隣接性にもとづく名づけがもとになって別の意味がカテゴリー化してできた名詞である。このような例は、換喩による名づけを由来としてはいるが、他の料理名と範列関係をなしており、共時的にはもはや換喩とはみなせない。強いて言うならば、この種の例は同音異義語となる。このような例は本稿では分析の対象からはずす。

次に、値の側面のずれが語用論的コネクターの存在にみえるものについて述べる。ここでいう値の側面のずれとは、名詞句の指示対象である値がもつ意味の総体の一部に文脈や述語によって焦点があてられる現象のことである。これは、Langacker(1984、1993)のいう参照点と活性化領域のずれをメンタル・スペース流に言いかえたものであり、(2)で示した類型がこれに該当する。例えば次の例では参照点として文に現れる「学校」に対して、連体修飾句と述語は、値がもつ別の側面、つまりその学校の建物や授業にそれぞれ焦点をあてている。しかし、後述するが、ここには換喩による語用論的コネクターは存在せず、名詞句解釈で値として選ばれるのは全体としての学校そのものである。

(8) 岡の上にある学校は4月に始まる。

以上、これまで換喩としてひとくくりにされてきた例に語用論的コネクターが存在するものと、値の側面のずれが語用論的コネクターの存在にみえるものがあることを述べた。ここからは、語用論的コネクターの存否の条件を明らかにし、換喩と呼べるものと呼べないものとの区別をおこなう。語用論的コネクターの存否は次のテストフレームによって判断することができる。

- (9) a. 名詞句と述語の結びつきの自由度
  - b. 真理条件の異なり
  - c. 名詞の意味の多面性に対する述語選択の自由度
  - d. コネクターの開閉における代名詞化の可否と焦点移動
  - e. 値解釈と役割解釈の違い

まず、名詞句と述語の結びつきの自由度について述べる。典型的な換喩と考えられる次の例では、ターゲットである客について言及するばあい、そのターゲットに関連したあらゆる述語を用いることが可能である。

- (10) a. かつ丼が食い逃げした。
  - b. かつ丼は着古した T シャツを着ていた。
  - c. かつ丼は無職だった。

しかしこれまで換喩とされていた次の例にはこのような自由度がない。

- (11) a. ヤカンが沸騰する/鍋が煮える
  - b. \*コップにヤカンを注ぐ/\*鍋が揚がる

ここから、換喩による拡張的な名詞句解釈に注目するとき、典型的な換

喩における名詞句と述語の結びつきが自由であるのに対し、これまで換喩 とみなされてきた値の側面のずれの例ではその結びつきが固定的で慣用的 であることがわかる。

次に、真理条件の異なりについて述べる。次の例では、換喩表現と換喩 を言語化した表現で真理条件は変わらず、同じイベントを文が表している。

- (12) a. かつ丼は金を払わずに出て行った
  - b. <u>かつ丼を注文した客</u>は金を払わずに出て行った

しかし、次の(13)では真理条件が変わり、別のイベントが表されうる。

- (13) a. 電話をとる。
  - b. 受話器をとる。

(13a)は言語化された参照点と活性化領域(= 受話器)がずれている例である。この文は、着信音が鳴っている電話機の受話器をとり通話を開始する、というイベントを表す。一方で、(13b)は、(13a)と同じイベントも表せるが、単に鳴ってもいない電話の受話器をとるというイベントも表しうる。つまり、(13a)では、電話機全体の機能が動作していることがイベント成立の必要条件となる。したがって、(13a)における「電話」は、値の側面として受話器が含意されることはあっても、名詞句の値として選ばれているのは全体としての電話機そのものであると考えられる。

次に、名詞の意味の多面性に対する述語選択の自由度について述べる。 國廣(1997:58-9)があげる次の例は「学校」という名詞がもつ意味の総 体を背景として、述語や文脈によってその意味の一側面に焦点があてられ ている、値の側面のずれの例である。

(14) a. 岡の上に松林に囲まれて<u>学校</u>が建っている。 [建築物]

b. 学校を卒業してから十年になる。

「制度]

c. 流感が猛烈にはやって、ほとんど<u>学校</u>全体がやられた。

[組織の成員]

d. 学校は八時にはじまる。

[授業]

従来、このような値の側面のずれの例も換喩とみなされてきた。しかし、このような例は「わたしが十年前に卒業したあの岡の上の松林に囲まれている<u>学校</u>は、普段は八時にはじまるが、流感が猛烈にはやって休校になっている」のように、問題となる名詞を文の要素にとって1つの文で表現できることから、名詞句解釈において値として選ばれるているのは全体としての学校そのものと考えられる。一方で典型的な換喩である「<u>かつ丼</u>が食い逃げした」という例は「(その)<u>かつ丼</u>は特上ロース肉をからっと揚げた香ばしい味だったが、金を払わずに逃げてしまった」といった表現が不自然となることからもわかるように、このような多面性はない。

次に、コネクターの開閉における代名詞化の可否と焦点移動について述べる。Fauconnier(1985)は、換喩には開コネクターと閉コネクターというふたつのタイプが存在することを指摘した。開コネクターとは、代名詞化をともなうテストで、コネクターがターゲットとトリガーの両方を可能な先行詞とし、かつ代名詞解釈の出力に適用できるコネクターである。また、閉コネクターとはコネクターがターゲットだけを主たる可能な先行詞とし、代名詞解釈の出力には適用できないコネクターのことである。

(15) a. 開コネクター: Plato is on the top shelf. *It* is bound in leather. You'll find that *he* is a very interesting author.

(Fauconnier1985:5)

b. 閉コネクター: The mushroom omelet left without paying.

\*? It was inedible.

(Fauconnier1985: 6)

おなじ換喩とよばれる例にこのような違いがでる理由については、これまであまり問題にされてこなかった。しかし、ここまでの語用論的コネクターの存否についての分析をふまえれば、この違いは換喩にふたつのタイプがあるのではなく、真に換喩と呼べるものとそうではないものとの違いを示していると考えられる。すなわち、閉コネクターの例ではトリガーとなる名詞の役割がターゲットを指定するための属性として用いられはしても、トリガーの役割そのものは問題にはならず、トリガーをうける代名詞化には失敗する。一方、開コネクターの例は値の側面のずれであるために、両方の代名詞でそれぞれの側面をうけることができると考えるのである。

さらに Fauconnier (1985: 6-8) があげる次の例の成立について、

- (16) a. Norman Mailer likes to read *himself* before going to sleep.
  - b. Plato is a great author. He is on the top shelf.

Fauconnier は、代名詞にコネクターが生じることによると考える。しかしこのような考えをとらずとも、もともと作家の活性化領域が作品にまで拡張しており、さらに作家というものの属性に「作品が本屋の棚にある」といったものが含まれていると考えれば、この種の代名詞の用法は語用論的コネクターが介在しない通常の用法と同じである。この考えを支持するものとして、さらに次のような焦点移動の例が考えられる。

(17) 私は<u>夏目漱石</u>が好きです/私は<u>夏目漱石</u>を高く評価しています /私は夏目漱石を研究しています

西村(2004、2008)も同様の指摘をしているが、これらの例では名詞句が作家としての漱石を指しているのか漱石の著作を指しているのかが渾然

一体としてわからない。これは、問題となる名詞句が作家としての属性を 値の側面としてあらかじめもっているときに可能となる表現である。この ような焦点移動は、「かつ丼を注文した客」という解釈で「私は<u>かつ丼</u>が 好きです」とは言いにくいことからみても、語用論的コネクターが存在す る換喩では生じないと考えられる。

ただし、この種の「作家で作品」を表す例は、作品をその作品の内容と みるか物体としての本としてみるかで、語用論的コネクターの存否の境界 に位置するとも考えられる。これは次の例の比較から判断できる。

- (18) a. Plato is on the top shelf. It is bound in leather.
  - b. \*Plato is on the top shelf. He is bound in leather.

すなわち、著作物という存在にはさらに、その著作物の内容と、物体としての著作物、というふたつの側面があり、著作物の内容が作者の活性化領域に含まれるのに対し、物体としての著作物はこれに含まれない。したがって、本の内容をとる解釈のばあいは語用論的コネクターが存在しない一方で、書店員の在庫管理についての会話において、

- (19) a. 夏目漱石はどこにあるの?
  - b. 夏目漱石なら芥川と太宰の横にあるよ。

のように、作家の名前で物体としてのその作家の著作物を指定するばあいは、語用論的コネクターによる間接的な指示が行われていると考えられる。

最後に、語用論的コネクターの存否が名詞句の値解釈と役割解釈の違い にもあらわれることを述べる。次の例を確認されたい。

(20) a. 腹に響く唸り声をあげて、そり投げの要領で<u>厚生労働省</u>は代理店を後方に投げた。(アキハバラ@ DEEP: 111)

b. 農林水産省と<u>厚生労働省</u>は26日、未通関の米産牛肉の輸入 手続きを27日に再開することを正式発表した。

(日本経済新聞:061026)

(20a)は、普段は厚生労働省や広告代理店で働く人物が秋葉原で開催される地下格闘技大会で戦うという、小説のなかでの特殊な文脈である。一方、(20b)は一般に「機関で責任者を表す」(Lakoff and Johnson 1980)とされる例である。これらの例はともに「厚生労働省」という名詞が談話に導入されているが、(20a)は語用論的コネクターが存在する換喩、(20b)は値の側面のずれが換喩にみえる例、と考えられる。なぜなら、(20a)では「厚生労働省」という役割は特定の人物を指定するためだけに用いられており「厚生労働省」の意味にこの人物は含まれていないからである。一方、(20b)では発表を行う人間は責任者の地位にあれば誰でも、「厚生労働省の代表者による発表」というイベントを成立させることができ、これは名詞句の役割解釈に対応している。このように、典型的な換喩と換喩にみえる例との違いは、名詞句の値解釈と役割解釈の違いにも帰着すると考えることができる。

#### 5. おわりに

以上、本稿では語用論的コネクターの存否に注目することで、これまで ひとしなみに換喩とみなされてきた例について「語用論的コネクターが存 在する典型的な換喩」「値の側面のずれが語用論的コネクターの存在にみ える換喩もどき」「換喩由来のカテゴリー化がなされているが共時的には もはや換喩とは呼べない名詞」の3つが存在することを指摘した。

本稿は名詞句単位の換喩の成立メカニズムについて、筆者のこれまでの 考え方をメンタル・スペース理論の観点からより妥当なかたちに整理・修 正したものであり、言語学の問題として換喩を扱うにはこの3つの区別を 念頭にいれなければそもそも研究が成り立たないと考える。

本稿では述べることができなかった問題として、典型的な換喩の語用論的コネクターについてのより詳細な議論と、通時的なレベルでの換喩が介在したカテゴリー化についての考察がある。今後は、これらをメンタル・スペース理論の観点からより精緻なかたちで一般化することをめざす。

#### 注

1) ここでいう修辞性は不透明であるが、あるカテゴリーに属する対象による異なるカテゴリーに属する対象の指定で生じる逸脱のニュアンスであると考える。

## 参考文献

- 井元秀剛 (1995)「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研究』 21. 大阪大学大学院言語文化研究科. 97-117.
- -- (2001)「メンタルスペース理論における定名詞句の指示について」『言語における指示をめぐって』(言語文化研究プロジェクト 2000),大阪大学大学院言語文化研究科、21-35.
- (2006)「コピュラ文をめぐる名詞句の意味論と語用論」『シュンポシオン 高岡幸一教授退職記念論文集』,朝日出版社,13-22.
- 大田垣 仁 (2010)「換喩と述定—内の換喩における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた—」『語文』94,大阪大学国語国文学会,44-56.
- 金水 敏 (1990)「「役割」についての覚書」『ことばの饗宴―筧壽雄教授還暦 記念論集』、くろしお出版、351-61.
- 國廣哲彌(1997)『理想の国語辞典』、大修館書店、
- 佐藤信夫(1982)「転義あるいは比喩のかたち」『理想』12, 理想社, 18-31.
- 瀬戸賢一(1997)『認識のレトリック』,海鳴社.(=『レトリックの宇宙』, 1986年,海鳴社を改訂したもの)
- 西村義樹 (2004) 「換喩の言語学」 『レトリック連環』, 風間書房, 85-108.
- (2008)「換喩の認知言語学」『ことばのダイナミズム』、くろしお出版、71-88.
- 森 雄一 (2001)「提喩および「全体 部分」の換喩における非対称性について」 『日本認知言語学会論文集』1,日本認知言語学会,12-22.

Fauconnier, G. (1985) Mental Spaces, Cambridge University Press.

— (1997): Mappings in Thought and Language, Cambridge University Press.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980): *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press.

Langacker, R. W. (1984): "Active Zones," BLS10, 172-88.

— (1993): "Reference-point constructions," Cognitive Linguistics 4-1, Walter de Gruyter, 1-38.

### 用例出典

石田衣良『アキハバラ@ DEEP』(文春文庫、2006 年)/日本経済新聞 (大学院博士後期課程学生)

## SUMMARY

Metonymy and Individuality: Existence or Nonexistence of a Pragmatic Connector in Noun Phrase Metonymy

Satoshi Otagaki

Metonymy is the rhetorical phenomenon in which a certain expression is used to explain another closely associated thing (e.g., THE PART FOR THE WHOLE, PRODUCER FOR PRODUCT, and OBJECT USED FOR USER).

In this paper, noun phrase metonymy is divided into three types.

According to the mental space theory, expressions that were considered metonymic in previous studies can be divided into three types: metonymic expressions that have a pragmatic connector, metonymy-like expressions caused by reference-point/active zone discrepancy, and homonyms derived from metonymic contiguity.

This paper will demonstrate the following conditions for the existence of pragmatic connectors.

- (1) Flexibility of the collocation of the noun phrase and the predicate
- (2) Difference in truth condition
- (3) Flexibility in predicate selection for reference-point/active zone discrepancy
- (4) Pronominalization and focus shift in open/closed connector
- (5) Difference between role and value interpretations

By using these conditions as the test frame, I will assert that only expressions having a pragmatic connector are metonymic.